

上海における伝統文化受容のパターン ——2017年統計調査データを用いた実証分析——

廣瀬毅士^{*}

Pattern-classification of traditional culture consumption in Shanghai: Statistical analysis of 2017 survey data

Tsuyoshi Hirose

要旨

本論文は、グローバル化する中国の消費社会の中で「中国の伝統的文化である事物がいかにかに受容され、どのような要因によって受容されているのか」ということに着目し、2017年に上海市民を対象に行った大規模統計調査で得たデータを用いた実証研究である。

本研究では中国の伝統的事物の受容・消費を「中国的伝統の受容」と位置づけ、11項目の中国の伝統的事物受容パターンを潜在クラスモデルによって類型化したところ、4つのパターンが析出された。各クラスは特定の性・年齢層に偏ることなく各層に広く分布していた。

さらにそれら受容パターンに類型化される規定要因について、愛国心仮説、国民意識仮説、生活スタイル志向仮説を立て、仮説で用いた概念を操作化した変数をデモグラフィック変数などとともに同時投入した多項ロジスティックモデルによって分析した。愛国心仮説に関しては中国伝統文化の一部のパターンに対して影響を与えていること、国民意識仮説に関しては、文化に関わる項目を中国人とみなす要件であるとする意識が中国への伝統文化受容につながるということがわかった。ライフスタイル志向仮説に対しては、「中国式」の生活志向が一つのパターンに正の効果を持つものの、西洋風（欧米式）生活志向が中国伝統文化受容のパターンに負の効果を持つことはなかった。

キーワード：消費社会、消費文化、グローバル化、ローカル文化、潜在クラス分析

1 はじめに

1.1 問題の所在

本稿の目的は、いまや世界有数の先進グローバル都市と化した上海における伝統的な中国文化の受容がいかなるパターンで行われているのか、いかなる要因によってそれらのパターンが規定されているのかを分析することである。廣瀬（2019）では2016年の東京都市圏のデータを用いて分析を行ったが、本稿では2017年に上海市民を対象に行った統計調査を用いてデータ分析を行う¹。

^{*} 駒澤大学GMS学部非常勤講師

¹ 中国調査が東京都市圏調査との比較分析を意図して実施されたという理由から、本稿は廣瀬（2019）と一部の記述や分析枠組が類似していることを、ここにあらかじめことわっておきたい。

そして本稿のリサーチクエスションは、グローバル化する中国の消費社会の中で「中国の伝統的文化である事物がいかにかに受容され、どのような要因によって受容されているのか」ということである。すなわち中国の伝統的事物の受容・消費を「中国的伝統の受容」と位置づけることで、それら受容パターンを潜在クラスモデルによって類型化し、併せてそれら受容パターンに類型化される規定要因を多項ロジスティックモデルによって分析する。

1.2 中国における伝統文化

中国はもともとアジアの先進文明国であったことから誇るべき伝統文化を有していた。しかし近代になって高度な科学技術と強力な軍事力を背景に西洋諸国がアジアに進出してくると、人びとに中国伝統文化と西洋の思想文化の緊張関係が生まれ、知識人の間で中国文化と西洋文化の優劣に関する文化論戦や対立構造があったという（陳 2017）。

1966年から始まる文化大革命の時期には、旧文化・旧思想・旧風俗・旧習慣のいわゆる「四旧」が否定され、伝統文化そのものを打破することがスローガンとなり、庶民レベルでも講談などで賑わいをみせた演芸場などは閉鎖された。ところが改革開放期を経て1990年代以降になると、文革への反動もあって伝統習俗への回帰がみられ、また中国の経済成長により生活にゆとりが出たことを要因として、伝統文化へのノスタルジーによる懐古ブームが起きた（岩崎 2010）。例えば伝統的な民族衣装としての漢服の再評価や、日本の着物に刺激を受けた唐装のブーム、もともとは満洲の衣装であったが中華民国期にチャイナドレスとして洗練された旗袍など、日常的なレベルでの伝統文化が再評価されている。

いっぽう国家の側の動きとしては、1989年の天安門事件以降に愛国主義や民族精神を強調するようになり、中国人のアイデンティティの確認をねらうようになった（兪 2006）。また、中国民間文化遺産抢救工程プロジェクト（2003～2012）によって伝統文化の保護・育成・保存が進められ、非物質文化遺産（習俗・伝説・芸能・工芸・体育活動・医薬など）の传承人認定も行われるようになった。かような伝統文化の復興が図ることで「中華民族の偉大なる復興」を具現するねらいがあるという。ともあれ、国家を統治する側が愛国主義や民族精神と結びつける形で伝統文化を強調していることは特筆されよう。

このように、近現代の中国においては、中国の伝統文化や西洋文化の事物をいかにかに受容するかということに関して、単に中国伝統文化vs西洋文化という構図だけでなく、伝統vs反伝統、ナショナリズムvs（共産主義）インターナショナルという複雑な構図が背景にあるといえる。これらの先行研究をふまえ、本稿では仮説として以下を導いておこう。

H_1 ：愛国心の強さが、中国伝統文化への好意を規定する。[愛国心仮説]

H_2 ：国民意識の強さが、中国伝統文化への好意を規定する。[国民意識仮説]

H_3 ：中国式あるいは西洋式生活スタイルへの志向が、中国伝統文化への好意を規定する。[生活スタイル志向仮説]

2 用いるデータと変数

2.1 調査方法と回収状況

本稿では、筆者を含む「グローバル消費文化研究会」が2017年に実施した上海市における統計的社会的調査から得たデータに依拠している。調査計画・標本計画の詳細、および標本抽出の結果や有効票の年齢分布等については廣瀬（2018）に詳述したため割愛しここでは概要を書くにとどめた²。調査の実施概要は以下に記す通りである²。

調査主体：グローバル消費文化研究会

調査資金：日本学術振興会（JSPS）科研費

研究種目：基盤研究（C）、課題番号：16K04097（研究代表者：廣瀬毅士）

研究課題名：「第三の消費文化」パラダイムに基づいた中国消費社会の実証研究

調査対象：上海市全域・北京市全域に居住する20歳～69歳の一般男女

調査手法：委託先調査会社のアクセスパネルを対象としたクローズド型Web調査

調査期間：2017年10月23日～11月7日

標本規模：上海市1500、北京市1000

標本設計：中国センサス（六普）データの性・年代の人口比を用いたクォータ法

なお、表題から明らかなように、本稿では紙幅の関係から上海市とはやや異質な北京市のサンプルを用いておらず、上海市のサンプルのみを分析対象としている。

2.2 分析に用いた主な変数

本稿のテーマである「中国伝統文化の受容」を分析するにあたって、この中に含まれる概念を次のように操作化しておきたい。

まず、「中国の伝統文化」という概念を、中国においてモノ・コト消費の対象となっている「中国の伝統的な事物」として操作化し、調査票の質問項目では「中国料理」「漢服・唐装・旗袍など伝統衣装」「伝統様式の建築物」「陶磁器」「茶藝や工夫茶」「漢詩（中国詩）」「書法」「京劇などの伝統国劇」「囲碁・将棋」「寺社」の各項目を挙げ、対応する中国語に置き換えた上で必要に応じて「中国の」といった修飾句を補っている³。また、中国文化の「受容」という概念に対しては、調査票に

2 統計的社会的調査においては無作為抽出法によって確率標本を得ることが望ましいが、その際に必要な市内全域の一般男女に広範なカバレッジを持つ抽出台帳（日本でいえば住民基本台帳や選挙人名簿）が中国では公開されていない。したがって本研究では現地の調査文化をふまえた次善の策として、広範な人々をリクルートして構築された十分大きなアクセスパネルを有する調査会社に委託を行い、Web調査を行うことにした。よって確率標本とは言い難いサンプル設計となり、標本に偏りが生じた可能性は排除できない。そのため統計分析についても、変数間の関連やその構造といった構造同定を目指すにとどめた。

3 これらの項目は、筆者を含む研究グループが東京都市圏（新宿40km圏内）で実施した統計調査で得た「日本的な事物」とできるだけ対応させ、中国人研究者・駒澤大学大学院生の意見を聞きつつ作成した。日本調査における「日本的な事物」とは、「和食」「ゆかたや着物などの和風の衣類」「和風の住宅」「和風旅館」「日本の民芸品」「京都の古い町並み」「温泉」「演歌」「相撲」「（日本の）お寺」「神社」の各項目である。東京都市圏調査については廣瀬（2019）を参照。

においてこれら11項目に対する回答者の好意を、「好き」「どちらかといえば好き」「どちらかという
と好きではない」「好きではない」の4件法にて測定している⁴。

次に、ローカル文化の受容に関する説明要因についても操作化しておこう。はじめに「愛国心」
として、「まわりの人と比較したとき、中国への愛国心(中国に対する愛着や誇りなど)が強いと思うか」
というワーディングのもとに5件法の選択肢により(つまり、中間選択肢をにおいて)質問をしている。
次に「国民意識」として「ある人を「本当に中国人である」とみなすためには、以下の項目はどれ
ほど重要だと思うか」という質問をおき、「中国で生まれたこと」「中国の国籍を持っていること」「人
生の大部分を中国で暮らしていること」「中国語で話せること」「中国の伝統文化を身につけていること」
「中国の伝統な宗教を信仰していること」「自分自身を中国人だと思っていること」「先祖が中国
人であること」の8項目をにおいて4件法の質問をしている⁵。これらはそれぞれ純化主義的ナショナリズ
ム(田辺 2011)を構成する出生地・国籍・文化・血統などの諸概念の測定項目として設けている。

また「生活スタイルの志向」として、「外国の生活スタイルを取り入れることについて、どのよ
うになるのが望ましいか」というワーディングのもとに問い、「洋風(欧米風)の生活スタイルに
近づいていく」「世界各国の生活スタイルを自由に取り入れる」「基本的には中国式の生活スタイル
を守る」「どこの国(または民族)のスタイルともいえない世界共通的なスタイルにしていく」「ど
れともいえない」の各選択肢を単一選択で質問している。以下に、これら分析に用いた変数の基本
統計量を示す。

表1 基本属性に関する記述統計量

	<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>S.D.</i>
女性 (ref. 男性)	1,500	0.48	0.50
年齢層 (ref. 20代)	1,500		
30代		0.22	0.42
40代		0.20	0.40
50代		0.19	0.40
60代		0.10	0.30
上海都市戸籍 (ref. それ以外)	1,500	0.78	0.42
大卒以上 (ref. 高卒以下)	1,500	0.82	0.38
等価世帯収入 (ref. 第1四分位未満)	1,500		
第1四分位以上第2四分位未満		0.22	0.415
第2四分位以上第3四分位未満		0.29	0.452
第3四分位以上		0.24	0.429

4 ただし分析に用いるにあたっては、後述のように2値化している。

5 これらの質問項目は、ISSP (International Social Survey Program) の1995 (National Identity) , 2003 (National Identity II) 調査票の質問を参考に作成した。

表2 中国伝統事物への好意（4件, 反転）の記述統計量

	<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>S.D.</i>		<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>S.D.</i>
中国料理	1,500	3.48	0.652	漢詩	1,500	3.06	0.766
伝統衣装	1,500	3.16	0.778	書法	1,500	3.13	0.731
伝統建築	1,500	3.21	0.705	伝統国劇	1,500	2.91	0.829
陶瓷	1,500	3.17	0.729	囲碁・象棋	1,500	3.01	0.783
中国茶藝	1,500	3.24	0.741	寺廟	1,500	2.83	0.829

表3 愛国心（5件）、国民意識（中国人とみなす要件, 4件）

	<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>S.D.</i>		<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>S.D.</i>
愛国心	1,500	4.09	0.59				
国民意識（中国人とみなす要件）							
出生地	1,500	3.21	0.70	伝統文化	1,500	3.33	0.67
国籍	1,500	3.52	0.62	宗教	1,500	3.19	0.80
生活	1,500	3.29	0.70	自己認識	1,500	3.45	0.62
言語	1,500	3.32	0.71	血統	1,500	3.29	0.72

表4 生活スタイルの志向（単一選択、有効 *N*=1,508）

	<i>n</i>	%
西洋風（欧米風）の生活スタイルに近づいていく	151	10.1
世界各国の生活スタイルを自由に取り入れる	597	39.8
基本的には中国式の生活スタイルを守る	523	34.9
どこの国（または民族）のスタイルともいえない世界共通的なスタイルにしてい	164	10.9
どれともいえない	65	4.3

3 方法

3.1 潜在クラス分析

本稿では、中国の伝統文化受容に関わる11の調査項目に対する反応からその受容パターンを分類すべく潜在クラス分析の適用を試みる。潜在クラス分析についてはMcCutcheon（1987）やHagenaars and McCutcheon eds.（2002）といった解説書や酒折・山口（2006）や三輪（2009）などの日本語の解説が知られているが、この分析手法を社会学分野に用いた日本語の論文も近年増えている。

この手法を用いる理由については廣瀬（2019）でも記したが、類似手法との相違を簡単にまとめておこう。しばしばパターン分類の手法としてよく使われるクラスター分析は、分類される個体間の距離の定義および結合アルゴリズムに様々な方法が存在する。それらのうちいずれを利用する

かによって、同じデータであっても形成されるクラスターが異なってしまふことがあるのがクラスター分析の難点である。また、ある個体が各クラスターに所属することの確率や、分類結果のデータへの適合度も不明である。

これに対して潜在クラス分析では、観測変数 X_1 と観測変数 X_2 がクラス分類変数 C の各カテゴリー C_1, C_2, \dots の中で統計的に独立（局所独立）となるようにクラス分類を行う、という方法をとる。ただし完全な局所独立をもたらすクラス分類は一意に定まることはないため、各個体がいずれのクラスに所属するかは確率論的に定まり、その確率を計算できる。

潜在クラス分析との類似手法として、同様に潜在構造の分析を行う因子分析がある。しかし一般的な因子分析は、潜在変数（因子）が連続的に分布していることを想定するが、潜在クラス分析ではカテゴリカルな潜在変数を仮定しており、この各カテゴリーが「クラス」である⁶。すなわちクラスは各個体が分類される潜在的なパターンである。因子分析が潜在変数という共通因子によって複数の観測変数間の相関を説明しようとするのと同様に、潜在クラス分析ではクラス分類というカテゴリカルな潜在変数によって複数の観測変数間の関連を説明するということになる。さらに観測変数についても、潜在クラス分析では2値データ、順序尺度変数、名義尺度変数でも分析が可能である。社会学にはカテゴリカルに分類される変数が多いので、社会調査で測定されるデータへの適用という点では有利な分析手法といえよう。

また、潜在クラス分析では、2クラス分類モデル・3クラス分類モデルというように相異なったクラス数での分類モデルが可能である。ただし各クラス分類モデルについて適合度が計算可能である。モデル間の比較には各モデルの尤度比カイ二乗値の差のカイ二乗検定（尤度比テスト）や、情報量基準の適合度指標であるAIC、BICおよびその派生指標によるモデル選択法などが用いられる。

3.2 分析の方針

本稿では中国の伝統文化として設けた10の調査項目に対する好悪の反応からローカル文化の受容のパターンを析出し、それらのパターンのいずれに所属するかということについていくつかの説明変数をもって要因分析を行った。統計分析の手続きは、3つのステップに分けることができる。①潜在クラス分析によってクラス数を決定すること、②調査対象の個々人を、最も所属確率の高いクラスに割当てること、③所属クラスを被説明変数として多項ロジスティック回帰分析を行い、ローカル文化受容のパターン分化の規定要因を探る、というものである⁷。

なお、潜在クラス分析を行うにあたってローカル文化の受容パターン分類に用いた「中国事物への好意」に関する10の質問項目を2値変数化（回答カテゴリーの合併）を行った。この操作を行った理由は、調査した10項目を調査票の4件法の回答のまま用いると、組み合わせの数が 4^{10} 通りとなってかなり多くなってしまい、ローカル文化受容を単純化したパターンにまとめづらく、推定結果がやや不安定な場合もあったからである⁸。

6 クラスターと呼ぶこともあるが、本稿では統一して「クラス」を用いている。

7 この3段階モデルによる分析手続きは永吉（2014）と同様であり、ローカル文化受容のパターンを描いた上でその規定要因を探るという研究枠組に合致する。

8 「好き」と「どちらかといえば好き」をカテゴリー合併し（1点）、かつ「どちらかという好きではない」と「好きではない」とを合併（0点）して2値変数化した。

また第3の留意点として、潜在クラス分析にあたってはなるべく制約をおかず、デモグラフィックな基本属性である回答者の年齢層（年代）のみを共変量としたうえでシンプルに潜在クラスモデルの推定を行った。しかるのち、個人が各クラスへの所属に寄与する要因を探るべく社会階層変数その他の説明変数によって多項ロジスティック回帰分析を行った。

4 結果

4.1 潜在クラスモデルの推定

中国ローカル文化の各項目についての好意から潜在クラス分析を行った。いったんすべての項目を投入して潜在クラスの推定を行ったところ、「中国料理」（中餐）はどのクラスにおいても反応率が高いため、クラス間の識別をより明確にするためこの1項目を除外して9項目とした上で再度推定を行った。クラスの推定の際には、基本属性などを共変量として投入していない。

例えば潜在クラスが2個と仮定した上で各ケースが所属するクラスを推定したモデルを「2クラスモデル」というように表現するとき、2クラスモデルから6クラスモデルまでを仮定してクラス推定した潜在クラス分析の結果が以下の表5である。パターン分類のクラス数を決定する手続きとしては、クラス数の異なる複数モデルのうち5%水準で棄却されないモデルの中から適合度指標を比較して採択するという探索的な方法を採用した⁹。結果を表6に掲出したが、ここでは適合度指標にBICを用いて、その値が最も小さい4クラスモデルを採用する。

表5 2～6クラスモデルのp値と適合度指標

モデル	対数尤度	BIC	L_2	自由度	p値
2クラス	-6221.5861	12582.12	842.88	492	0.000
3クラス	-6069.3178	12350.72	538.34	482	0.038
4クラス	-6050.4107	12386.04	500.53	472	0.180
5クラス	-6036.1385	12430.62	471.98	462	0.360
6クラス	-6023.1164	12477.71	445.94	452	0.570

4.2 各クラスのプロフィール

前項に提示した各クラスについて、各個体が最も高い確率で所属すると考えられるものをかりに「所属クラス」と呼ぶとすると、各所属クラスについて、「中国料理」（中餐）を除く9項目への平均的な反応確率をグラフにしたのが図1に示す折れ線グラフである。

9 この手続きは、クロス表のログリニア（対数線形）モデル分析におけるモデル選択と同様である。クロス表のログリニア・モデルとモデル選択については廣瀬（2007）などを参照。

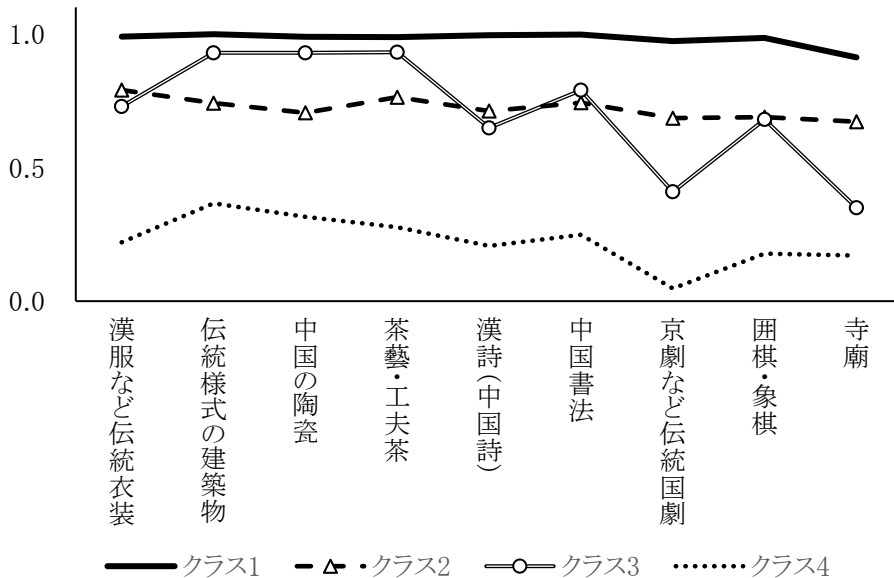


図1 析出された4クラスと和風事物との関係（縦軸は反応確率）

この推定された4クラスがどのような中国伝統事物への好意が高いパターンを示しているのか、簡単に記しておこう。クラス1は全ての項目に対して好意的な反応が高いパターン、クラス2はクラス1ほどではないものの全ての項目に対して中程度の反応を示すパターン、クラス3はクラス2と似ているものの「伝統様式の建築物」「中国の陶磁」「茶藝・工夫茶」がクラス2よりも高く、逆に「京劇など伝統国劇」「寺廟」がクラス2よりも低いクラスである。クラス4はすべての項目に対して好意的な反応が低いパターンとして読み取ることができる。なお各クラスへの所属個体数は、クラス1が38.2%、クラス2が32.7%、クラス3が22.9%、クラス4が6.3%であった。

この5つのクラスについて、性別・年代によってプロファイリングを行ったのが図2・図3である。性別に関していえば、クラス1・クラス3はほとんど男女差がなく、クラス2・クラス4はやや男性が多いという特徴がある。また、5つの各クラスについて年齢層の内訳をみると、各クラスの年代構成はさほど異なっておらず、日本の東京都市圏データが示す結果（廣瀬 2019）とは異なることがわかる。特にクラス1・クラス3についてはほとんど年齢構成が同じといってよい。これら質問項目すべてに対して低反応であるクラス4も概ね似た年齢構成であるが、60代でこのクラスに所属する者がゼロであることが唯一の特徴である。いずれの項目にも中程度の反応をするクラス2は、他のクラスよりも20代の割合が若干少なく、50代の割合が少々多いという程度である。いずれのクラスにせよ、特定の年齢層に多いという効果はなく、中国の伝統事物を好む／好まないという志向性は性別や年齢層によって偏在しているというのではなく、一種のライフスタイルとして各性別・各年齢層に分布しているということを意味している。

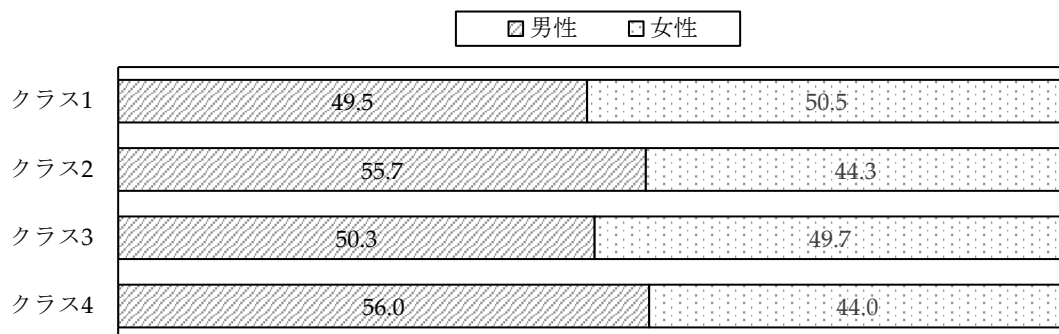


図2 各クラスのプロフィール（性別）

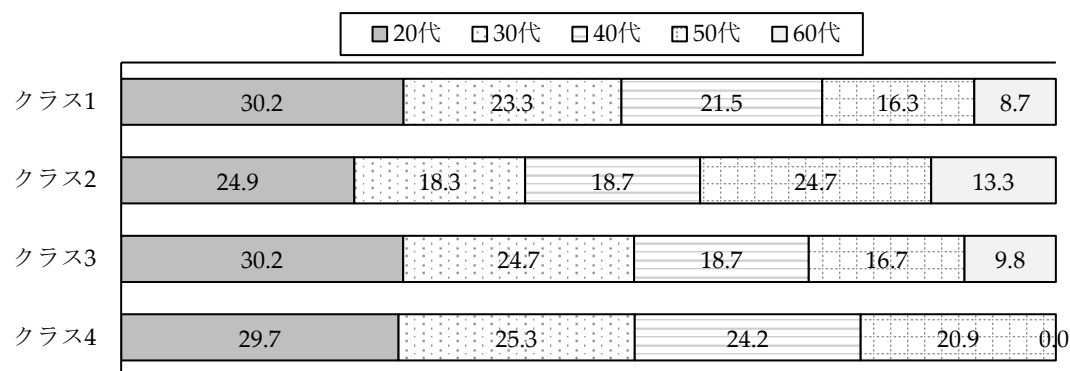


図3 各クラスのプロフィール（回答者年代）

4.3 ローカル文化受容パターンの規定要因：愛国心と国民意識

前節のようなローカル文化の受容パターンについてクラス分類を終えたところで、これら潜在クラス所属の規定要因を多項ロジスティック回帰分析によって探る。

はじめに、愛国心と国民意識（中国人とみなす要件）についてみていこう。多項ロジスティック回帰分析に投入する上では参照カテゴリー（ここでは「どれともいえない」）を設けた上で他の各項目を選択したことをダミー変数とした。また、多項ロジスティック回帰分析では被説明変数についても参照カテゴリーを設ける必要があるが、これをクラス4としている。質問文や選択肢の具体的なワーディングについては2.2節において述べた通りであり、これらを投入して多項ロジスティック回帰分析を行った結果が表6である。

この表で留意すべき点は、愛国心は5件法、国民意識（中国人とみなす要件）については各々4件法で質問しているものの、質問紙の選択肢番号を逆転しているため数値が大きいほど愛国心が高い、あるいは中国人とみなす要件として重視しているということである。その結果、表6で係数が大きいほど各々のクラスへ所属する確率を押し上げることになる。

表6 多項ロジスティック回帰分析の結果（愛国心、国民意識）

	クラス1		クラス2		クラス3	
	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>B</i>	<i>SE</i>
切片	-8.585**	1.379	0.333	1.270	-1.588	1.321
女性 (ref. 男性)	0.246	0.243	-0.079	0.243	0.139	0.248
年齢層 (ref. 20代)						
30代	0.143	0.323	-0.068	0.329	0.042	0.329
40代	-0.053	0.331	-0.028	0.335	-0.177	0.341
50代	-0.522	0.353	0.277	0.347	-0.281	0.359
60代	17.030**	0.285	17.741**	0.281	17.429	0.000
上海都市戸籍 (ref. それ以外)	-0.254	0.365	-1.174**	0.354	-0.985**	0.360
大卒以上 (ref. 高卒以下)	-1.835**	0.641	-1.735**	0.633	-1.279*	0.645
等価世帯収入 (ref. 第1四分位未満)						
第1四分位以上第2四分位未満	-0.134	0.356	0.131	0.355	-0.009	0.359
第2四分位以上第3四分位未満	-0.140	0.331	0.091	0.331	-0.180	0.337
第3四分位以上	0.617	0.389	0.662	0.393	0.438	0.398
愛国心	1.030**	0.221	0.311	0.217	0.495*	0.222
国民意識 (中国人とみなす要件)						
出生地	0.029	0.179	0.002	0.178	-0.154	0.181
国籍	0.385*	0.191	0.230	0.187	0.459*	0.193
生活	0.189	0.172	-0.013	0.170	0.104	0.173
言語	0.259	0.182	-0.003	0.178	-0.180	0.181
伝統文化	0.529**	0.179	0.021	0.175	0.265	0.178
伝統的な宗教	0.742**	0.154	0.394**	0.152	0.144	0.153
自己認識	0.069	0.192	-0.095	0.187	0.169	0.193
血統	0.230	0.177	0.184	0.176	0.051	0.179

参照カテゴリーはクラス4。N=1,500, Nagelkerke R^2 =.244 * p <.05, ** p <.01

この分析結果をみると、モデル適合度を示す疑似決定係数Nagelkerke R^2 の数値は244となり、社会調査のマイクロデータ分析としては比較的良好である。個々の説明変数の効果について有意なものを太字で示したが（以下の分析でも同様）、60代がクラス1・クラス2への所属確率を押し上げる有意な効果を持っていることになる。また、上海都市戸籍を持っていることはクラス2・クラス3への所属確率を下げる有意な効果を持っていること、大卒以上であることがクラス1・クラス2・クラス3への所属確率を下げる有意な効果を持っていることが示されている。

愛国心については、クラス1・クラス3への所属に関して、参照カテゴリーのクラス4への所属に

比して有意な正の効果を持っている。やはり愛国意識が伝統文化の受容に効果を持っていることになるが、クラス2に対しては効果を持っていないことから、すべてのパターンへの所属に対して影響を与えているというわけでもないことに留意したい。

国民意識（中国人とみなす要件）についてみると、各項目のうち「中国の国籍を持っていること」を重視する場合にクラス3への所属確率が高まる効果を持っている。また、「中国の伝統文化を身につけていること」を重視する場合にクラス1への所属確率が高まる効果を持っていること、また「中国の伝統的な宗教を信仰していること」を重視する場合にクラス1・クラス2への所属確率が高まる効果を持っていることが分析結果からわかることである。

4.4 ローカル文化受容パターンの規定要因：生活スタイル志向

次に、生活スタイル志向の効果についてみてみよう。この質問文や選択肢の具体的なワーディングについては2.2節および表4において述べた通りであるが、複数項目から単一の項目を選択する質問項目であるため、多項ロジスティック回帰分析に投入する上では参照カテゴリー（ここでは「どれともいえない」）を設けた上で他の各項目を選択したことをダミー変数とした。また、多項ロジスティック回帰分析では被説明変数についても参照カテゴリーを設ける必要があるが、これを表6での分析と同様にクラス4としている。

表7に生活スタイル志向の質問を説明変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果を示すが、表中では「西洋風（欧米風）の生活スタイルに近づいていく」を「西洋風（欧米式）」、「世界各国の生活スタイルを自由に取り入れる」を「混交」、「基本的には和風の生活スタイルを守る」を「和風」、「どこの国（または民族）のスタイルともいえない世界共通的なスタイルにしていく」を「共通」と表示している。この分析結果をみると、モデル適合度を示す疑似決定係数Nagelkerke R^2 の数値は135となり、社会調査のマイクロデータ分析としてもやや低い。個々の説明変数の効果について有意なものを太字で示したが、60代がクラス1・クラス2への所属に対して（クラス4に比して）正の効果を持っている。また、上海都市戸籍がクラス2・クラス3への所属に対して負の効果を持っていること、大卒以上がクラス1への所属に対して負の効果を持っていること、等価世帯収入の第3四分位以上がクラス1への所属に対して正の効果を持っていることが挙げられる。「中国式」志向がクラス1への所属に対して正の効果を持ることになる。これは中国の伝統文化受容に対して「中国式」生活スタイル志向が正の効果を持つということであり、いわば当然の結果が得られたとも言えるが、「中国式」志向はクラス2・クラス3に有意な効果をもっていないことから、いずれのパターンの伝統文化受容にも影響を与えているというわけでもないことに留意したい。

表7 多項ロジスティック回帰分析（生活スタイル志向）

	クラス1		クラス2		クラス3	
	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>B</i>	<i>SE</i>
切片	2.239**	0.857	3.657**	0.838	2.918**	0.852
女性 (ref. 男性)	0.258	0.234	-0.014	0.239	0.240	0.243
年齢層 (ref. 20代)						
30代	0.043	0.313	-0.105	0.326	0.002	0.325
40代	-0.182	0.317	-0.096	0.328	-0.297	0.333
50代	-0.635	0.340	0.231	0.342	-0.357	0.354
60代	17.212**	0.275	17.925**	0.275	17.605	0.000
上海都市戸籍 (ref. それ以外)	0.006	0.355	-1.124**	0.348	-0.868*	0.354
大卒以上 (ref. 高卒以下)	-1.528*	0.620	-1.604*	0.619	-1.071	0.630
等価世帯収入 (ref. 第1四分位未満)						
第1四分位以上第2四分位未満	-0.241	0.340	0.090	0.347	-0.036	0.351
第2四分位以上第3四分位未満	-0.074	0.309	0.095	0.317	-0.105	0.323
第3四分位以上	0.760*	0.372	0.727	0.382	0.493	0.388
生活スタイル志向						
西洋風 (欧米風)	0.622	0.630	0.028	0.608	-0.444	0.630
混交	0.609	0.562	-0.056	0.537	-0.122	0.547
中国式	1.529**	0.587	0.111	0.566	0.317	0.575
共通	0.842	0.631	-0.264	0.617	0.143	0.621

参照カテゴリーはクラス4。N=1,500, Nagelkerke $R^2=.135$ * $p<.05$, ** $p<.01$

5 結論と展望

5.1 結論

本稿では、上海における統計調査データから中国伝統文化の受容のパターンを潜在クラスモデルによって分析し、その結果4つのパターンが析出された。次に各個体を最も所属確率の高いクラスに分類した上で、そのいずれに所属するかというメカニズムについて、性別・年齢などの属性を統制しつつ愛国心や「国民」意識の項目、および望ましい生活スタイルに関する志向によって受容パターンへの所属を説明するモデル分析を行った。

はじめに H_1 [愛国心仮説]:「愛国心の強さが、中国伝統文化への好意を規定する」および H_2 [国民意識仮説]:「国民意識の強さが、中国伝統文化への好意を規定する」を検証すべく、同じく各クラスへの所属について性別・年齢などの属性を統制しつつ愛国心（自己評価）や国民意識（中国人

とみなす要件)などを説明変数とした多項ロジスティック回帰分析を適用した。 H_1 [愛国心仮説]に対する検証結果は、愛国心はすべてのパターンに対してではないためいくぶん留保的ではあるものの、中国伝統文化への好意に対して影響を与えていると言えるだろう。また H_2 、[国民意識仮説]に対する検証結果としては、「伝統文化を身につけていること」や「伝統的な宗教の信仰」といった「文化」に関わる項目を中国人とみなす要件であるとする心的傾向が中国への伝統文化受容につながるから、中国政府が愛国主義や民族精神と結びつける形で伝統文化を強調し、その復興をつうじて「中華民族の偉大なる復興」を具現しようとしたねらいは効果があったのかもしれない。

次に H_3 [ライフスタイル志向仮説]:「中国式あるいは西洋式生活スタイルへの志向が、中国伝統文化への好意を規定する」という仮説に対しては、所属クラスを生活スタイル志向によって説明するモデルを立てて分析したところ、「中国式」志向はどのような中国伝統事物にも反応するパターンには正の効果を持つという当然の結果が得られたが、逆にいえばそれだけしか正の効果を持っていない。したがって、 H_3 の作業仮説を「西洋風（欧米式）」志向が中国伝統文化受容のパターンに負の効果を持つとするならば、これは支持できないということになる。

5.2 今後の展望

分析枠組みに関しては、本稿においてナショナリズム仮説を棄却したところで、ではいかなる要因によってローカル文化の受容がなされているのかということについてもう一步進めた研究を行う必要がある。たとえば間々田（2016）のいう「第三の消費」概念が示すように、何らかの文化的価値の追求として中国伝統事物の消費が行われている可能性もある。たとえばアイデンティティやライフスタイルに関する変数との関連を分析することになるが、それは異なるテーマのため稿を変えての論究としたい。

今後のテクニカルな展望を述べよう。本稿の分析は、第1ステップとして回答者年齢のみを共変量とした上で潜在クラス数を析出し、第2ステップとして個人の所属クラスを決めてそれをデータセットに追加した後に、第3ステップとして愛国心や「国民」意識といった説明変数を投入した多項ロジスティック回帰分析を行ってクラス所属の規定要因を分析している。しかし構造方程式モデリングと同様に、あらかじめ説明変数を共変量として組み込んだ上で潜在クラスを同時推定する方法も採用し得るので、比較を試みたい。

また、実証分析のためのエビデンスデータを得る統計調査についての展望についても記そう。本稿は2017年に実施した上海市での統計調査を用いて中国伝統文化の受容パターンを描こうとした試論的な分析である。その研究枠組として中国伝統文化受容を「中国の伝統的な事物への好意」によって操作化したのが、実際の消費の実践行為を測定する調査を行うことによって、ローカル文化の受容という消費行為をより明確な文化実践のパターンとして描き得るだろう。さらに、「東アジアグローバル都市における伝統文化受容」というテーマの重要性は日本や中国だけにとどまるものではない。東アジアの新興グローバル都市における同様の枠組みの比較調査によって、この問題をより通社会的に、立体的に捉えることが重要と考える。既に今回の統計調査でデータをとった北京市は上海との比較の上でいかなる特徴を示すものか比較分析を試みたい。

文献

- 陳熙, 2017, 「1950～60年代における「中西文化」に関する論争——徐復観と殷海光の比較を中心に——」『国際文化研究』23: 149-163.
- Cohen and Kennedy, 2000, *Global Sociology*, New York University Press.
- 藤原翔・伊藤理史・谷岡謙, 2012, 「潜在クラス分析を用いた計量社会学的アプローチ：地位の非一貫性、格差意識、権威主義的伝統主義を例に」『年報人間科学』33: 43-68.
- Hagenaars, J. A. and A. L. McCutcheon (eds.), 2002, *Applied Latent Class Analysis*, Cambridge University Press.
- 廣瀬毅士, 2007, 「ログリニア分析」村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士（共編）『SPSSによる多変量解析』オーム社, 299-328.
- , 2009, 「和風消費を規定する価値要因の分析——グローバル化の中のローカル文化——」『経済社会学会年報』31: 185-197.
- , 2018, 「中国消費社会の消費文化と意識——上海・北京2都市の統計調査の結果をもとに——」『応用社会学研究』60: 91-105.
- , 2019, 「ローカル文化受容のパターン分類と規定要因——和風志向は「ぶちナショナリズム」か——」『東京通信大学紀要』1: 59-72.
- 稲垣佑典・前田忠彦, 2015, 「潜在クラス分析による「日本人の国民性調査」における信頼の意味とその時代的変遷の検討」『統計数理』63(2): 277-297.
- 岩崎菜子, 2010, 「現代中国の伝統文化復興と蘇る『水滸伝』もの」『アジア遊学』131: 62-72.
- 間々田孝夫, 2007, 『第三の消費文化論——モダンでもポストモダンでもなく』ミネルヴァ書房.
- , 2016, 『21世紀の消費——無謀、絶望、そして希望』ミネルヴァ書房.
- McCutcheon, A. L., 1987, *Latent Class Analysis*, Sage.
- 三輪哲, 2009, 「計量社会学ワンステップアップ講座(3) 潜在クラスモデル入門」『理論と方法』24(2): 345-356, 数理社会学会.
- 永吉 希久子, 2014, 「外国籍者への権利付与意識の規定構造——潜在クラス分析を用いたアプローチ——」『理論と方法』29(2): 345-361.
- 西澤治彦, 2014, 「現代中国における『伝統文化』へのノスタルジー」『東方』406号.
- 酒折文武・山口和範, 2006, 「潜在クラスモデルの局所独立性を利用した共変量調整法」『日本統計学会誌』36(1): 25-36.
- 田辺俊介（編）, 2011, 『外国人へのまなざしと政治意識——社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房.
- 汪テイ, 2009, 「中国における外来文化の受容と相克: 「全国祝祭日休暇法」改定の背景」『鈴鹿国際大学紀要 Campana』, 15: 135-148.
- 俞彭年, 2006, 「伝統文化を見直す中国」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』, 7: 341-348.